

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19984

研究課題名（和文）『失われた時を求めて』タンソンヴィルの部屋の生成と最終篇冒頭の校訂に関する研究

研究課題名（英文）The Study on the genesis of the room of Tansonville and the recension of the beginning of the Final volume of In Search of Lost Time.

研究代表者

平光 文乃 (Hiramitsu, Ayano)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・助教

研究者番号：50909661

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：プルーストの死後出版となった最終篇『見出された時』冒頭は、1)タンソンヴィル滞在の場面か、2)タンソンヴィルの主人公の部屋の描写か、という重要な校正の問題に取り組んだ。決定づけるには至らなかったが、草稿上の印（-などの記号、空白）等は区切りとして不相当であることを明らかにし、主人公の世界観を象徴する部屋の描写による区切りの有効性を補強する根拠を発見し、両説ともに考察を深めることができた。1)の説では、二分化されたタンソンヴィル滞在与コンブレイ・IIとの対応関係を提唱し、この問題に新たな光を当てた。さらに草稿分析から、報告者の提唱する部屋の描写が担う構造的性をより強固に裏付けることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プルーストの『失われた時を求めて』最終篇『見出された時』（死後出版）の冒頭が、1)タンソンヴィル滞在の場面か、2)タンソンヴィルの主人公の部屋の描写かという問いは、1989年以来等閑視されてきたものの2018年に吉川一義氏が再度提起した重要な校訂の問題である。本研究はこの問題に取り組み、最終的に決定づけるには至らなかったものの、両説に対して考察をさらに深めることができた。この問題を論じる論文などはいまだないため、本研究が果たす学術的意義は大きいといえる。

研究成果の概要（英文）：The beginning of the final novel, "Time Regained," which was published after Proust's death, addressed the important proofreading question of whether the scene was 1) a scene of a stay in Tansonville or 2) a description of the protagonist's room in Tansonville. Although we were not able to reach a decision, we were able to deepen our consideration of both theories by clarifying that marks (- and other symbols, blank spaces), etc., on the draft are inappropriate as delimiters, and by finding evidence to reinforce the validity of the delimitation by the description of the room symbolizing the protagonist's worldview. In the theory of 1), we proposed a correspondence between the dichotomized Tansonville stay and Combray I and II, shedding new light on the issue. Furthermore, the draft analysis provided stronger support for the structural nature of the room depictions proposed by the reporter.

研究分野：フランス文学

キーワード：『見いだされた時』冒頭に関する考察 マルセル・プルースト 生成研究

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、70年代から続くブルースト研究の大きな潮流の一つである、草稿調査に基づく文学テキストの生成研究、特に近年富に充実してきた草稿資料や新資料に基づく研究成果が求められていることにある。こうした学術的背景の一方で、申請者はブルースト作品における部屋の描写を研究してきた。同小説の冒頭や各篇、部、章などの初めには、全てではないものの、その後の物語の世界観を象徴とするような部屋の描写が現れる。それが小説の重要な構造を担っていることを博士論文(『ブルーストの作品における部屋の描写と創造行為に関する総合的研究』、2012、京都大学)や、それを基にした拙著(上記参照)において指摘した。その上で課題となるのが、上述の学術的背景に基づき件の成果を草稿調査によって後付けることである。また、ブルースト研究全体への貢献のためにはとりわけ、「新プレイヤー版」最終篇『見出された時』冒頭に配置された「タンソンヴィルの部屋」の草稿調査が求められる。というのもこの描写が、作家の死後刊行された同小説の第六篇と最終篇の区切りに大きく関わるからである。ゆえに本研究課題の学術的「問い」としては、件の描写がどのように生成されたかを明らかにすることに加え、同小説の第六篇と最終篇の区切りをどこに決定づけるか、が挙げられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は上記の「問い」への解を探求すること、すなわち『失われた時を求めて』に現れる「タンソンヴィルの部屋」の描写の生成過程を明らかにするとともに、第六篇と最終篇とをどこで区切るか、という重要な校訂作業を決定づけることである。

本研究の独自性と創造性は、上記の探求により同小説における部屋の描写の担う構造の有効性を明らかにすることに加え、これまで学術的かつ総合的に検証されてこなかった、同箇所区切りに関する問題を検討することにある。これまでの版における区切りは、二つ存在する。第一に、ブルーストの死後、初版である NRF 版出版に際し編者である弟のロベール・ブルーストによってなされ、1989年の「新プレイヤー版」出版の際、編者であるブライアン・ロジャースらによって採用された区切り、つまり最終篇をタンソンヴィルの部屋から始める、というものである。1989年以降それが踏襲されてきたと言えるが、これに異議を唱えたのが、2018年同小説の日本語訳第12巻を出版した吉川一義である。彼は異なる区切りを導入するにあたり、その経緯を「訳者あとがき」に記してはいるが、これまでの版と、彼の主張を学術的に検証した研究は未だない。そこで本研究では、これらの諸説を検討、草稿調査によって確認しつつ、さらに独自の草稿調査によってこの問題に解を与える。それにより、今後フランスで刊行される新版の校訂作業にも貢献できると考える。

3. 研究の方法

本研究では第一に、(1)過去の版(吉川訳を含む)において、どのような意図と根拠に基づき、第六篇と最終篇の区切りを設定したのかについて、各版の概説を基に問題となる要素を整理する。第二に、件の箇所の草稿調査を行う。(2)- 作家の手が最後まで入った清書原稿カイエ XV、その前段階の草稿帳カイエ 55・50 を転写、分析し、上記の説を検証する。その際には特に問題となる、『失われた時を求めて』の主人公の滞在場所による区切り、草稿上の印などによる区切り(-などの記号、作家自身による作業メモ、空白等)世界観を象徴する部屋の描写による区切りなど、有効と思われるこれら3つの区切りの内、どれが機能しているかについて考察し、明らかにする。さらに、(2)- 同小説における部屋の描写の構造性が顕著に表れた冒頭部の草稿において、該当箇所に対応する部屋の描写の転写・分析をする。最終的に上記の調査を通じて「タンソンヴィルの部屋」の生成過程と第六篇と最終篇の区切りに関する各版の見解、その妥当性を明らかにし、区切りを決定づける。そして上記の調査に基づき、部屋の描写による区切りという構造の有効性を明らかにする。さらに、その構造の変遷を詳らかにすることを旨とする。

4. 研究成果

初年度においては、研究者が依拠する「新プレイヤー版」その他の版において、各編者がどのような意図と根拠に基づき、第六篇と最終篇の区切りを設定したのかについて、各版の概説を基に問題となる要素を整理した。その上で、件の箇所の草稿調査を行い、作家の手が最後まで入った清書原稿カイエ XV、その前段階の草稿帳カイエ 55、50などを必要に応じ転写、分析し、上記二説(1、2)を検証した。その際には特に問題となる、草稿上の印などによる区切り(-などの記号、作家自身による作業メモ、空白等)小説の主人公の滞在場所による区切り、主人公の世界観を象徴する部屋の描写による区切りなど、有効と思われるこれら3つの区切りの内、どれが機能しているかについて考察した。1)か2)か、決定づけるには至らなかったものの、の区切りは不相当であることを明らかにし、の区切りの有効性を補強する根拠を発見し、1)2)両説ともに、さらに考察を深めることに成功した。また1)の説については、従来指摘さ

れたことのなかった、タンソンヴィル滞在の描写とコンブレー1・II との対応関係を提唱し、この問題に新たな光を当てることができた。これらの研究成果について、まず各版に基づく問題要素の整理までを、2021年9月18日大阪大学フランス語フランス文学会第87回研究会にて、「プルーストの作品における創造の部屋」と題した発表で、今後の研究の展望として発表した。さらに全体の研究成果を、2022年4月2日関西プルースト研究会にて「『見出された時』冒頭に関する一考察」として発表した。

最終年(二年)度では、これまでの研究成果を論文としてまとめ、「『見いだされた時』冒頭に関する考察 タンソンヴィル滞在か、タンソンヴィルの部屋の描写か」として、『GALLIA』62号に発表した。それとともに、昨年度の調査により明らかとなった、『失われた時を求めて』における部屋の描写の構造的な裏付けの根拠となりうる、草稿帳カイエ50の転写、分析に着手した。プルーストの草稿帳の中でも特に難解と言われるカイエ50の読解は困難で、計画していたほどの進捗は見込めなかったが、先行研究において転写されていた部分を活用することで、カイエ50の分析を進めることができた。このカイエ後半部には、問題のタンソンヴィルの部屋の描写だけでなく、報告者が構造的な裏付けを担う部屋として挙げる『失われた時を求めて』冒頭の不眠の夜、コンブレー2末尾の不眠の夜の回想、第五篇『囚われの女』一日目の朝、またその締めくくり、二日目の朝、さらにレオニ叔母の部屋などの描写の元となる諸断片が、要素が混在した未分化な状態で描かれていた。このことは、未分化な断片から派生した各描写が後に小説の節目となる箇所配置されたことを示しており、報告者の主張を裏付けるものといえるだろう。

結果として、1)タンソンヴィル滞在か、2)同部屋の描写か、決定づけるには至らなかったものの、1)の主張の裏付けとなる、巻などの区切りとして草稿上の印など(- などの記号、作家自身による作業メモ、空白等)は不適當であることを明らかにし、また2)を補強する、主人公の世界観を象徴する部屋の描写による区切りの有効性を証明する根拠を発見し、1)2)両説ともに、さらに考察を深めることに成功した。また1)の説については、二分化されたタンソンヴィル滞在の描写とコンブレー1・II との対応関係を提唱し、この問題に新たな光を当てることができた。このことによりどちらの説であっても、ともに報告者の提唱する部屋の描写が担う世界観の象徴、構造的な裏付けという機能の有効性を示すことができた。さらに最終年度に進めた草稿帳カイエ50の分析からは、報告者の提唱する部屋の描写が担う構造的な裏付けをより強固なものにすることに成功した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平光 文乃	4. 巻 62
2. 論文標題 『見いだされた時』冒頭に関する考察 タンソンヴィル滞在か、タンソンヴィルの部屋の描写か	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 GALLIA	6. 最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平光 文乃
2. 発表標題 ブルーストの作品における創造の部屋
3. 学会等名 大阪大学フランス語フランス文学会 第87回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平光 文乃
2. 発表標題 『見出された時』冒頭に関する一考察
3. 学会等名 関西ブルースト研究会 2022年度春季会
4. 発表年 2022年～2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------